

# 女性恐怖のドイツ的起源

— ヨーロッパ文化史の再構築に向けて —

越智 和弘

## 序論：ヨーロッパ全土の支配と独自文化の放棄

- I. 快楽敵視の起源は先史時代に求めるべきものなのか
- II. 古代ギリシア・ローマに快楽敵視が存在した証拠はない
- III. だれもが思い出したくない空白の二百年
- IV. 女性恐怖と快楽敵視が誕生するメカニズム

### I. 快楽敵視の起源は先史時代に求めるべきものなのか

今日、西洋だけが世界全体に規範を供給する支配文化となりえた理由はどこにあるのか。この、多くにとってしばしば不愉快でできれば避けて通りたい問いへの端的な答が、資本主義という、人間をますます大きなスケールで呑み込み機能する社会システムを西洋人が発明したことにあるという見解に、まずは異論の余地はないであろう。

もはやだれも逃れようのないまでに、われわれの生活を全方面から規定しているこの制度を前に、それでも世界は西洋だけで成り立っているわけではないとか、非西洋にも多種多様で豊かな文化が存在するなど主張することは、まずその発想自体が、西洋近代が生みだした国民国家への帰属意識に束縛されたものだと言わざるをえないし、さらには家族制度からさまざまな個人単位へと細分化しつつあるプライオリティの移行にしても、そこから生まれる個人の心地よさや自尊心への意識の高まり自体が、これまた資本の拡大発展にきわめて都合良く作用するものなのだとはいわざるをえない。

資本主義の震源地をつきとめることを通し、これまでのヨーロッパ史の通念

を再構築するという本論が掲げる目標を達成するためには、個人の抛り所さえ救えばよいとする以上のごとき生業に付き合うゆとりは、もはやない。そんなことに労力を費やしている間に、地球全体が資本主義によって食い尽くされてしまう可能性が高い。いや、もしかしたら、それはもう時間の問題なのかもしれないのだ。

自然を際限なく支配し、世界を広大な狩猟の場に塗り替えること、それこそが西洋の男たちが数千年来夢見てきたことであり、西洋に生まれたあらゆる思想は、詰まるところすべてその目的のために成り立っていると言いきったのは、二〇世紀ドイツの哲学者アドルノとホルクハイマーであった。<sup>1)</sup> 人間を動物ともっとも区別する崇高な資質として西洋人が誇ってきた精神、そしてその産物である理性もまた、じつは地球環境を狩猟区とみなし搾取し尽くすための方便でしかなかったと教えてくれるこれら哲学者の言葉を聞くと、それでは、そもそも西洋人が精神を初めて意識化したのはいつかとなると、一般にはプラトンやアリストテレスあたり、すなわち古代に求めがちである。しかしだとすれば、世界を狩猟の場へ転換する最大の武器となる精神が、何をきっかけに、いかなる時代への反応として生まれたのかを探りだすためには、すくなくとも古代ギリシアよりは古い時代を遡ることが不可欠となるように思える。はたしてこの見方は正しいのだろうか。

「でも、そんなの大昔のことじゃない。いまのわたしたちとは関係がないし、それに証明のしようもないでしょう！」というある女子学生の感情的な発言が記憶に残った。それは、性的快樂を女性に起因するものとして恐れ敵視する性格が、西洋以外のいかなる文化にもみられないこと、そして、まさにこの女性恐怖と快樂敵視を核心にもつ西洋にしかない禁欲の特質こそが、資本主義を生み、西洋を圧倒的な支配文化へと飛躍させる原動力となった経緯を、先史時代にその起源を見いだす哲学者や文化人類学者らの諸説を紹介しながらたどる大学院講義をおこなっている最中のことであった。

まずこの女子学生には、すくなくとも資本主義が支配する今日の世界が、すでに何から何まで、西洋の男性的価値にしたがい規定され尽くされたうえで成立しているという初歩的な現状認識が欠落している、あるいはそうした真実を面白くないものとして認めたくない意識が働いていることも否めないだろう。ただそうした基礎知識の不足を加味したうえでも、女性恐怖と快樂敵視を通し

た性の独特な昇華システムを動力源に、もはやあらゆる規範の供給源になっていることさえ人びとに意識させないまでに拡大した西洋資本主義の源泉にたどりつくためには、紀元前をはるかに遡る時代へと立ち戻らざるをえないのだとすれば、いくら歴史はそれを語るものが構築する物語でしかないとか、そもそも人文科学 Geisteswissenschaft とは精神=Geist によって構築する学問なのだから、父権制の起源を構想することは、それがいかに遠い過去のことであれ、十分に可能なのだなどという御託を並べてみても、やはり説得力に欠ける面が出てしまうことは否めない。

しかし、これまでヨーロッパ文明の起源を先史時代に見いだす常套手段とされてきた視点には、ひとつの落とし穴、いや、それ以上に秘密を知られたくないがための意図的なトリックが隠されているような気がしてならない。ヨーロッパの起源といえば、すぐさま古代ギリシア・ローマの伝統へ立ち戻りたがる西洋知識人をみていると、そこには妙な胡散臭さを感じられるのである。

もし彼らが主張するように、女性によって体現される快楽敵視を核とする禁欲主義の起源が本当に先史時代にあり、その伝統が、以降一貫して受け継がれてきたのだとしたら、明らかに先史時代のあとにおとずれる古代ギリシアやローマ時代における、肉体美のあれほど大らかで高らかな賞賛と、現代人をも驚嘆させるまでの日常的快楽の重視はどう説明しうるのか。逆にいえば、肉体と快楽を敵視する面からみれば、これほどローマに似つかわしくない文化はありえないまでに厳しい禁欲が充満するヨーロッパ中世が、なぜローマ帝国のあとに生まれることができたのか。そのうえおまけに、この新たなヨーロッパ的秩序の担い手が、古代ローマのもっとも忠実な継承者であることを宣言するなどという奇妙奇天烈なことが起こりえたのか。

いや、本当のところは、資本のダイナミズムを起動させるために必要な女性的快楽とセックスへの憎悪は、むしろ、先史時代よりずっとわれわれに近い時代に、古代ギリシアやローマの地中海文明とは縁もゆかりもない場から持ち込まれたのに、その発生をめぐる真実が、今日ある西洋世界を説明するうえできわめて不都合なため、意図して曖昧にされてきたのではないだろうか。しかしもしそうだとすれば、どうしてわれわれはそれをみすみす見落としてきたのだろうか。

かつて、父権制の起源を探り出せば、男への隷属を強いられる以前の、女性にとってより好都合な世界を再発見できるにちがいないという期待を抱いた

のは、一九七〇年代西洋のフェミニストたちであった。当時彼女らが示した原始母権制への憧憬を、文明の進歩とは獣性からの離脱の度合い、すなわち性欲の抑制をどの程度まで実現しているかによって測定しようとしたノーベルト・エリアスの西洋至上主義的立場を粉砕することに学問的情熱を傾けたドイツの社会学者ハンス・ペーター・デュルは、若干の皮肉をこめて次のように伝えている。

「今日フェミニストの多くは、それが古代ミノア人であれ、現代のスマトラに暮らすミナング・カバウ族であれ、とにかく母権制の存在を証明することに躍りになっている。なぜならもしそれに成功しさえすれば、フェミニズムに敵対する陣営からは少なくとももう、黙れ、母権制など存在しうるはずがない！とは言われなくなるだろうから。」<sup>2)</sup>

先史時代に女性の地位が高く尊重される母権的共同体が存在していた証拠を、マーガレット・ミードやプロニスラウ・マリノウスキーら文化人類学者のフィールドワークと結びつけることで見つけようとした七〇年代フェミニズムが、やがて気が遠くなるほど遠い過去を問題にせざるをえない現実を前に気力を失っていった過ちから抜け出すために、女性歴史家ゲルダ・ラーナーは、問題を、父権制を否定し母権制を復活させる道を探ることだけに限定するのではなく、そもそも「女性を従属させるシステムづくりになぜ女たちが参加せざるを得なかったのか」という「大きな謎」を解く方向へシフトさせねばならない、と説いた。<sup>3)</sup>

つまりこれは、根っから戦闘的であると同時に、女性的快楽を敵視する思想を世界中に教育して回るという二つの際立った性格を軸に成立している、とフランスの現代思想家ジャン＝フランソワ・リオタールが規定する西洋の男性帝国主義<sup>4)</sup>に、じつは女たちもまた否応なく参画せざるをえない時期が歴史上存在した可能性に目を開かせてくれる。

ただここには、注意深い観察が必要となるだろう。つまり、リオタールの洞察が正しいとすれば、やがて資本主義の発生源をなすことになる〈戦闘性〉と〈禁欲の流布〉という二つの要素のうち、ひとつ目の方は、先にホルクハイマーとアドルノが述べた世界全体を広大な狩猟区へと変貌させるという西洋の男たちが遠い過去に抱いたであろう願望とほぼ重なるものだと見なせる。しかしつづけてリオタールが、制圧と支配を求める西洋の男たちには「愛する意図が

ない」<sup>5)</sup>と言い、愛を禁じ快樂につながるすべてを敵視する倫理観を、資本主義を支えるもう一方の大黒柱に数えるのをみると、この快樂敵視の思想は、はたして本当に先史時代に生まれ、古代ギリシアやローマを経ても変わることなく受け継がれてきた伝統だといえるのだろうか。やはりここにも、先に浮かび上がったのと同じ疑問が生じてしまう。

一般に快樂敵視の思想は、〈欲動の断念〉と〈禁欲の発見〉という文明への扉を開く鍵をなしたとされる要素と、ほぼ同等のものとして解釈されることが多い。しかしこれは、問題をいつの間にか人類に共通する広大な海へ解き放ってしまうことになる。これによって、西洋にしかみられない特性を絞り込むことが困難になってしまったことが、従来の考察の大半が犯してきた過ちであろう。たとえばフリードリヒ・エンゲルスが「一部族の内部で無制限の性交がいと生まれ、したがって、あらゆる女が一樣にあらゆる男のものであり、またあらゆる男が一樣にあらゆる女のものであった」<sup>6)</sup>と説明する「無規律性交」の原始的状態から、人類が太古の昔に自らの性欲を抑制する術を覚え脱皮するにいたった過程は、人類を総体としてみとうえでの発展史を知るうえではたしかに重要である。しかし、こうした禁欲をめぐる一般的兆候に目を奪われることは、西洋にしか生まれなかった資本主義の本質という、われわれが本当に捉えたいものの在処を、いつの間にか人類共通の問題へとすり替えてしまう。われわれの関心は、単に性欲を我慢したり先送りにする術にあるのではない。セックスに関わる快樂のすべてを邪悪な罪とみなし、その根源が女性にあると決めつけることで、女性と快樂を引つくるめて恐れ憎み嫌うという、どうみても地球上で西洋にしか存在しない性格がいかにして誕生したかという、その点だけなのである。

「真に文明化された女がいるとすれば、その女はすでに死んでいるか、あるいは男になっているかのどちらかである」<sup>7)</sup>というリオタールのことばからは、西洋の男たちが、秩序を機能不全に貶めうる女性的快樂を是が非でも排除しなければならぬと考えた意志が伝わってくる。イギリスの宗教学者カレン・アームストロングは、そうした断固とした女性敵視の思想が生まれる源泉を、キリスト教に内在する性格に見いだしている。快樂を女性に起因する原罪と決めつけるキリスト教が西洋人の価値観をすべてにわたって規定してきたからこそ、女性恐怖と快樂敵視のメカニズムは、西洋にしかみられない特質だといえるのである。

「ヨーロッパとアメリカのキリスト教的世界には、セックスへの憎悪と恐怖が充満している。西洋の男たちは、セックスを邪悪なものに見なすよう教え込まれてきたため、男たちをこの危険な性的欲望の世界へと誘惑する女たちを恐れ憎んできたのである。キリスト教は西洋社会を形成してきた。そしてこのキリスト教は、世界の主要な宗教の中で、唯一セックスを憎み恐れる宗教なのである」<sup>8)</sup>

キリスト教そのものに、女性恐怖に基づく快楽敵視の思想が組み込まれていたとするアームストロングの洞察は、一見スムーズですんなり納得させられそうになる。しかし、はたしてこの考え方は、そのまま受けとりうるものなのだろうか。じつは、キリスト教はローマにおいてすでにコンスタンティヌス大帝の時代から、すなわち、われわれに近い時代にたとえば、ちょうどナポレオンの時代から一九七〇年代の性革命にいたるまでに相当する期間、すでにローマ教会すなわちローマ帝国の国教であったのである。このよく忘れられがちな事実を考慮すれば、キリスト教そのものに最初から女性恐怖と快楽敵視の精神が組み込まれていたとするアームストロングの説は、そのままのかたちでは受け入れがたくなる。

つまり、むしろここで考慮せねばならないのは、キリスト教の教義そのものが変容した可能性である。ちょうど十六世紀初頭に、カトリック教会の性的金銭的墮落を耐え難いものとみなしたドイツ人修道士マルティン・ルターが、禁欲のさらなる厳格化に向けて、キリスト教のローマからアルプス北方地域への移管を呼びかけ、それによって近代資本主義の起点をなす宗教改革の幕が切って落とされたことを思い起こすと、それは、そもそも性や快楽に奔放な地中海文明に対してヨーロッパ北方民族が仕掛けた最初の戦いではなかったような気がしてくる。そうではなく、じつはローマ帝国崩壊後すでに、その第一幕ともいべき決定的な衝突が起きており、その際、新たなヨーロッパ文明の担い手のなかに本来的に組み込まれていた女性恐怖と快楽敵視の思想こそが、中世のキリスト教倫理観を形づくるうえで決定的な役を果たしたのではないだろうか。

## II. 古代ギリシア・ローマに快楽敵視が存在した証拠はない

たしかに古代ギリシアの哲学者アリストテレスは、女について、その本性が冷たく、無能力で精液をつくりだすことができないため、「まるで生殖力のない雄のようである」<sup>9)</sup>と述べ、女をより劣等な存在と見なす考えを打ち出した。

また、男の精液には生殖力だけでなく、「靈魂的原理の部分」も含まれており、そのなかこそ神に最も近い精神の作用である理性があるとし、精神と理性を最高位におく西洋的規範をはじめて明言したことで知られる。<sup>10)</sup> さらに「身体は雌に、靈魂は雄に由来する」<sup>11)</sup> と位置づけ、人間を動物と区別する精神が男にしか備わらないこと、そして女は肉体的な存在であるがゆえに蔑まれるという、のちにキリスト教に受け継がれる靈肉二元論の萌芽も示している。

しかし、これはあくまで生物学的にみた女性の劣位を論証しようとしたものであって、女性に帰属する快樂を恐れ敵視するものとは違う。この両者を混同し、すでにアリストテレスの時代に女性恐怖に基づく肉体的快樂への敵視が存在していたなどというものがいれば、それは全くの誤りだと言わざるをえない。すでに広く知られるように、古代ギリシアからヘレニズムを経てローマにいたるまで、地中海文明の人々にとって肉体美は一貫して高い賞賛の対象であった。肉体に悪魔が宿るなどという考え方は、そこには微塵たりともみられない。クレタ島では、上半身裸の男女が闘技場で雄牛を相手にアクロバットの技を競うのを観衆は楽しんだし、ホメロスの時代以降、男たちが素っ裸で運動能力を競ったのは、文明が劣っていて着る服がなかったからなどではないことは、言うまでもない。アテネでプラトンやソクラテス、そしてクセノポンが議論を闘わせた晩餐（シンポジウム）の席には、裸の美少年による給仕とさまざまな芸に長けた女たちの演出が欠かせなかった。

ローマの日常においても、肉体の顕示は罪とは無縁であり、なんら問題視されるものではなかった。奴隷市場で競りにかけられる奴隷たちは、男女にかかわらず公衆の面前ですべての衣類を剥がれ、病気などの兆候がないか評価されるのがしごく当たり前であった。キリスト教が徐々に浸透しはじめる二〇〇年頃のローマにおいても、男にしか許されないミトラ信仰から閉め出された女たちだけが執り行うディオニュソスまたはバッカスの祭典においては、閉ざされた空間の中で女たちがミステリアスな快樂に浸り、官能の世界に酔いしれる伝統がつづいていた。<sup>12)</sup>

とにかくローマの時代までは、人間の裸体を罪や邪悪と結びつける倫理観が社会の規範をなすようなことはけっしてなかったし、むしろ支配者は、有名な「パンとサーカス」のことばで知られるように、領土を治めるためには大衆への快樂の提供が不可欠だと考えていた。

二世紀頃のローマには十一の巨大浴場があり、そこにはいちどに二万人が入

浴することが可能であったとされる。<sup>13)</sup> それぞれが温度調節機能をもつ冷浴室、温浴室、熱浴室、乾式サウナなどを備えており、なかでもローマ最大級の豪華さを誇ったディオクレティアヌス浴場は、幅三百七十メートル、奥行き三百九十メートルからなる浴場に三千人がいちどに入浴できたし、有名なカラカラ浴場になると、さらに大きな幅四一〇メートル、奥行き三八〇メートルからなる大浴場に毎日六千から八千人が入浴しただけでなく、その周囲には、居酒屋や軽食堂が軒を連ね、さらにトレーニングジムや観客席付きの運動場、庭園散歩道、図書館にプールや休憩室までが備わる、現代人でも驚くスケールの巨大な総合レジャー施設であった。<sup>14)</sup>

コロッセオの円形大闘技場では、北方ヨーロッパの森で捕獲された巨大熊とアフリカから連れてこられたライオンの死闘が繰り広げられたかとおもいきや、アリーナ全体が水で満たされ、剣闘士が乗る船と船が海上戦さながらにぶつかり合うなか、死体が水面を赤く染めて漂うのに観衆は熱狂したとされる。今日のサーカスの原点をなすマクシムス戦闘競技場では、いちどに二十五万人も収容しうる観客席からローマ市民は、かの映画『ベン・ハー』でも再現された戦車競争に息をのんだのである。<sup>15)</sup>

大衆に娯楽を提供することを支配者がきわめて重要視していた様は、ローマ市内に限らず、ローマ軍が北方ヨーロッパへ領土を拡大する際、必ずといっていいほど制圧した地域に大浴場や劇場、競技場といった大衆娯楽施設を建設していることから見てとれる。もともとゲルマン人の攻撃から領土を守る前線基地として建設されたケルンやマインツやトリアーといった今日のドイツの都市には、かつてローマ人が築いた大浴場や劇場の跡が残っている。紀元前五十五年、ドーバー海峡を渡りローマから遙か北方のブリテン島に侵攻したカエサルは、島の南部に豊かな温泉の湧く地を発見し、そこをバース Bath と名づけ浴場の建設を命じた。そして百年後には、さまざまな浴場にサウナからマッサージ室からスポーツジムまでも併設する一大温泉施設として完成するのである。

しかしローマ帝国崩壊後のヨーロッパをみるとどうだろう。上記のバースが十八世紀以降になってようやく、長く見捨てられてきた廃墟から復活しはじめるのに象徴されるように、五世紀以降のヨーロッパ人は一転して、浴場などには見向きもしなくなるのである。アルプス以北にその重心を大きく移しながらも、ローマ帝国の精神をもっとも忠実に継承することを標榜した神聖ローマ帝国は、たしかに二つのことはローマから忠実に受け継いだ。それらは、宗教、

つまりローマ教会としてのキリスト教と、法律と国家制度である。<sup>16)</sup>しかし、かのコロッセオに匹敵する大闘技場はその後のヨーロッパにおいては、一つとして建設されることはなかったし、カラカラ浴場のような巨大レジャー施設がどこかで建造されたという話も聞かない。いや、それどころか、ドイツ皇帝の支配する中世以降は、風呂にはいること自体が罪悪として忌み嫌われるようになり、王侯貴族でさえ一生に一、二度しか風呂に入らない時代が到来するのである。そこには、宗教と政治は継承しながら、ローマが統治するうえで欠かせない要素と見なした「心地よいこと＝快樂」を人民に提供する考え方に関しては、完璧なまでの断絶が見て取れる。このあまりにも対照的なコントラストは何を意味しているのか。

### Ⅲ. だれもが思い出したくない空白の二百年

今日あるヨーロッパ文明の起源が、古代ギリシア・ローマ以前ではなく、もっと近い過去に存在する可能性を、ドイツの歴史家セバスチャン・ハフナーは指摘している。彼は、ローマ帝国崩壊後の五世紀から七世紀にかけての時代にヨーロッパに起きた真実が、現代の人びとにほとんど伝わっていない事実に着目する。そしてその理由が、その時代に起きた本当のことを「おそらく誰も思い出したくなかった、もしくは後世に思い出させたくなかったからだろう」と推察しているのである。<sup>17)</sup>

どうして思い出したくないのかを探り出すのは、さほど難しいことではない。それは、現代にいたるまで国家、法律、軍事の面で西洋の規範をなしているといっても過言でないローマ帝国が、以上の二世紀あまりの期間に、文明のレベルからすればローマの足元にもおよばないゲルマン人<sup>18)</sup>によって破壊し尽くされただけでなく、この野蛮な勢力によって西ヨーロッパ全土、いや北アフリカまでもが席卷されるなかから、今日につながるヨーロッパの新たな秩序が誕生したからである。

ゲルマン人による殺戮に次ぐ殺戮の想像を絶する大混乱の中から、今日あるイタリアも、フランスも、スペインも、そしてイギリスも、まぎれもなくゲルマン人の王が支配する王国として誕生したのである。これらの地域からゲルマン人がなんらかの理由で撤退するか追いだされ別の民族に取って代わられた事実は、唯一北アフリカから侵攻したイスラム系ムーア人によって、今日のスペイン地域を支配していた西ゴート王国が八世紀初頭に滅ぼされたことを除けば、

まったくくない。

国民国家を前提とする価値が浸透した今日的観点からすれば、ヨーロッパ全土がゲルマン人の支配下におかれるなかから、今日につながるヨーロッパ文明が生まれた事実は、一般にはできれば認めたくないものであろう。とりわけドイツ人が二〇世紀にはいって二度も世界戦争を引き起こした悪夢を経たあとの現代において、この事実は居心地の悪い不名誉としか思えない。だからこそヨーロッパ人は、自分たちの優れた文化を語る際、とかくゲルマン的秩序が支配していた中世を「暗黒の時代」と呼びあまり触れたがらず、古代ギリシア・ローマからあたかもルネサンスを経て近代が生まれたかのごとく語りたがるのだろう。

しかしこの二世紀あまりに起きたことは、いまや世界を隅々にまで塗り固めんとする資本主義の発生源を見いだすうえでは、きわめて重要な意味をもつと言わざるをえない。なぜなら、〈世界全体を狩猟区とみなす戦闘性〉と〈女性恐怖と快楽敵視を旨とする禁欲〉という二つの要素から成り立つことがますますはっきりしつつある現代の資本主義は、逆にいえば、これら二つの要素を何にもまして重要視する民族のなかからしか生まれ得なかったはずだからである。すでにみたように、地中海文明に属する古代ギリシアやローマ人には、戦闘性という要素に関してはある程度備わっていただろうが、第二の要素である性的快楽を憎み嫌う精神となると、それを、文明を築くための絶対条件とみなしていた証拠はどこにも見いだせない。むしろ逆に、すでにみたように、民衆に心地良さとスペクタクルを提供することを、きわめて重要なものと考えていたとみなさざるをえないのである。

ローマ帝国崩壊後、ヨーロッパ文明の担い手が、狂暴なまでに戦闘的であると同時に快楽を極端に忌み嫌う、ローマ人とはまったく別種の民族に取って代わられたことを知ることから、ヨーロッパ文化史を初めて整合性のあるものとして把握しうる道が開ける。ちょうど日本でいえば、聖徳太子の大化の改新によって天皇を中心とした中央集権的な律令制度がそろそろ整いはじめる時期に、ヨーロッパでは、高度なレベルに達していたローマ文明がいちどすっかり破壊尽くされ、すべてをゼロからリセットするかのごとく、まったく価値の異なる人種による支配がはじまったのである。しかしこの新たな支配者たちは、石の家をひとつ建てる知識もノウハウも持ち合わせていなかった。ヨーロッパの支配権を確立したとたんに彼らが行ったことは、かろうじてローマの高度な文化

やテクノロジーの継承者として生き残ったキリスト教の修道士や司祭を自分たちの側につけることと、自らの野蛮な出自を消し去らんとするかのごとく、ローマの継承者を名乗ることであった。それはちょうど、人類の文明が廃墟と化した理由を探ることをタブー視し、まるで最初から自分たちが高度な文明の担い手であったかのごとく地球を支配する猿の世界を描き出した SF 映画『猿の惑星』と、どこか似通った現象である。

すでに四〇八年の秋、ローマは北方スカンジナビア地域から南下してきた西ゴート族のアラリヒ王率いるゲルマン人によって包囲され兵糧攻めにあっている。城壁内で市民の餓死者が出るなか、ローマ側は、五千ポンドの金、三万ポンドの銀、四千枚の絹の衣、三千枚の紫染めした毛皮、三百ポンドの香辛料などをゲルマン側に献上し撤退を求めるが受けいれられず、とうとう四一〇年八月二十四日に市門は開かれ、市街地になだれ込んだゲルマン人は略奪と破壊の限りを尽くしたと言われる。<sup>19)</sup> さらに四五五年には、ガイゼリヒ王率いるヴァンダル族によってまたもや攻め入られ、略奪の嵐にさらされている。<sup>20)</sup> ローマの華やかな政治と商業の中心地であったフォロ・ロマーノを、今日みられるような廃墟と化した張本人は、こうしたゲルマン人であった。

それを考えると、ローマ帝国の崩壊が、さらに二〇年あまり後の四七六年であることは、むしろ意外である。逆によくそこまでもったものだと驚かざるをえない。ローマ帝国の最後の息の根をとめたのが、ゲルマン人であったこともよく知られた事実である。四七六年、ゲルマン人傭兵隊長オドアーケルが、西ローマ帝国最後の幼き皇帝ロムルス・アウグストゥルスを年金生活へ追いやったのが、ローマ帝国が崩壊した瞬間であった。千二百年あまりもつづいたこの巨大な帝国の幕引きが、あまりにあっけないものであったことを、ドイツの現代作家フリードリヒ・デュレンマットは、戯曲『ロムルス大帝』のなかで喜劇的に描き出している。

オドアーケル： もはや時これまでです。

ロムルス： 我をどうしようというのだ。

オドアーケル： 年金生活にはいつていただきます。

ロムルス： 我に年金生活をせよだと？

オドアーケル： もはや残された最後の解決策です [沈黙]

ロムルス： 年金生活は、おそらく我にとって起こりうる最悪の事態だぞ。

オドアーケル： わたし自身にも最悪の事態が迫りつつあることをお忘れなく。陛下は、わたしをイタリア王に任命せねばなりません。

[中略]

ロムルス： 我は、ゲルマン人傭兵隊長オドアーケルをイタリアの王に任命する！

ゲルマン人たち： イタリア王万歳！

オドアーケル： それに対し私は、ローマの皇帝にカンパーニア地方にあるルクルの別荘に赴くことを命じる。その際皇帝は年に六千の金貨による年金を支給されることを宣言する。<sup>21)</sup>

その後ヨーロッパ全土がゲルマン人の支配下におかれる様子を概観すると、次のようになる。スペインに当たる地域は、フランク族によって西に押し出された西ゴート族によって支配され、西ゴート王国となる。ヴァンダル族は、ローマをはじめ各地で略奪をくり返しながらか最終的には北アフリカに落ち着く。イギリスは、四、五世紀に現ドイツ最北部のシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地域から北海を渡ったアングル族とザクセン族によって支配され、現イギリス王朝の基が築かれる。フランスは、北海沿岸の小さな地域に暮らしていたフランク族が五から七世紀にかけて激しい殺戮をくり返しながらか、やがてそのほぼ全域を支配下に治める。イタリア半島を治めていた東ゴート王国は、やがて六世紀後半期に北方バルト海沿岸地域から南下してきたランゴバルド族によってその支配権を奪われる。そのランゴバルド族が設立したロンバルディア王国は、八世紀後にフランク王国に吸収される。これによってヨーロッパ中央部の支配権をほぼ手中に収めたフランク王国が、中世ヨーロッパの新体制となる神聖ローマ帝国の基盤をなすことになる。

#### IV. 女性恐怖と快樂敵視が誕生するメカニズム

ではローマ帝国崩壊後、全ヨーロッパがゲルマン部族の支配下におかれたのに、その後どうしてすべて「ドイツ」とならなかったのか。その答は、きわめて単純明快なのだが、その点にいたる前に、いまいちどヨーロッパが、二つのまったく異質な文化圏の衝突から成り立っており、その関係はおそらく今日にいたるまで基本的には変わっていない事実を確認しておく必要があるだろう。二つの文化圏とは、言うまでもなく古代ギリシア・ローマに代表される古くか

ら地中海沿岸地域を中心に暮らしてきた人びとと、紀元前にインド北西部からヨーロッパ東北部への移住を果たしたものの、ローマ帝国全盛期には主にバルト海沿岸から現スウェーデン周辺の厳寒の地に追いやられてきたゲルマン系部族のそのことである。もちろん二つの文化圏のあいだには、現フランス地域でガリア人と呼ばれていたケルト系の民族をはじめ、さまざまな少数民族もまた存在していた。しかし、大きくみれば、古代後期から中世への過渡期に、ヨーロッパの支配権が地中海文化圏から北方ゲルマン民族へと大きくシフトしたことが、その後の歴史を現代に至るまで基調づけたと言わざるをえない。

では、地中海文明とゲルマン部族の文化とでは、なにがもっとも異なっていたのか。その答を見いだすことが、そのままヨーロッパ全土を支配していたはずのゲルマン支配が、ヨーロッパのドイツ化につながらなかった答を提供することになる。以上にみたように、たしかにヨーロッパ全土の支配権が、五世紀以降ローマからドイツ人の祖先に当たるゲルマン民族の手に渡ったことは紛れもない事実である。しかしこの支配権の移行は、ほぼ軍事的政治的な領域に限られたかたちで進行した。いや、それどころかローマ帝国の国境線を先陣を切って突破し、イタリア半島になだれ込んできたヴァンダル族やゴート族にとっての唯一の関心事は、殺戮と略奪であり新たな国を制定し治める意図など微塵たりともなかったのである。その後イタリアにロンバルディア王国を築くランゴバルド族にしても、フランス全土を支配するフランク族にしても、文化や宗教の面にはきわめて疎く、政治支配にとって有効だという打算が働いて初めて宗教に関心を抱く有様だった。

ガリア人をほぼ皆殺しにしたうえで、現在のフランス全土を支配下に治めたフランク族を率いる王クロトヴィヒは、初めてパリに首都を制定したのち、支配を確実なものにするためにはローマの知的遺産と教会の後ろ盾を不可欠とみなした。四九七年のクリスマスの日、自らゲルマン信仰を捨て、キリスト教の洗礼を受けたのである。同時に三千からなるフランク族の戦士が一気にそれになったとされる。これが今日的な意味でヨーロッパがキリスト教化した決定的な瞬間である。以降ヨーロッパ全土を支配するゲルマン人は、ヴォータンやオディンを信仰する自らの宗教を捨て去り、自分たちとは縁もゆかりもないローマ教会を自分たちの宗教として宣言するのである。言語に関しても、自らの手で破壊し尽くした敵国ローマの言語であるラテン語を唯一の公用語として取り込み、その使用を帝国全土に強要する。ゲルマン人が、ヨーロッパの支

配と引き替えに独自の宗教と言語を放棄したことの意味は、最後に考えることとし、ここでは、言語の放棄が女性恐怖を生む要因としても働いた可能性について触れておきたい。言語に関しゲルマン人はルーン文字をもっていたというものの、それは呪いや祭りで用いるだけで、自分たちが古高ドイツ語という言葉を使用している自覚さえまったくとっていいほど欠いていた。たしかにこの時代までに言語を重要視していたのはローマ人だけであるから、ゲルマン人だけをあげつらうわけにはいくまいが、それにしてもローマに代わって支配権を握ったゲルマン人が、領土内に自分たちの言語を浸透させる努力をまったく払わなかった事実は、その後のヨーロッパ形成に大きく影響する。

軍事的支配はヨーロッパ規模で成し遂げておきながら、言語を浸透させ独自の宗教や文化を育む努力を完全に怠ったゲルマン人には、女性的な力によってすぐさま手痛いしっぺ返しがおとずれる。そしてそれは、子育てと日常言語の担い手である女たちへの恐怖や憎悪、そして深い不信感を生むことになった可能性が高い。ヨーロッパの新たな支配者であるゲルマン人は、それがイタリア全土を支配下に治めたランゴバルド族であれ、スペイン地域を支配した西ゴート族やスエーベ族であれ、フランスを築いたフランク族であれ、制圧した地域に自分たちの言語と宗教を浸透させることにはまったく関心を払わなかった。それは結果として、いくら当初の権力者がゲルマン人であれ、それらの男たちと交わった今日のイタリア、フランス、スペイン地域の女たちから生まれた子は、ことごとく母親が話す地中海文化の民衆言語、すなわち今日のイタリア語、フランス語、スペイン語に通じる言語で育つことになったはずである。そうなると、父親が話していた古高ドイツ語に属する言語は、もともとゲルマン人の暮らす今日のドイツ語圏やオランダやイギリス、そしてスカンジナビア地域を除けば、たとえいかに今日あるヨーロッパ人の大半がゲルマン人との混血となったにせよ、次世代にはすでに地中海言語をを話すものたちによって占められるようになっていたであろう。破壊と略奪しか眼中になかったゲルマン人自らが招いた宿命だとはいえ、制圧下にある地域で生まれた自分の子どもが、すぐさま母親の操る地中海言語を話し、もはや自分の文化や宗教を理解しない様を目の当たりにしたときの驚愕が、女性への深い戦慄へと発展したとしてもおかしくない。

エンゲルスが、先史時代において近親相姦のタブーが生まれ、無規律性交から集団婚へ移行する過渡期に母権制が存在した根拠として、「集団婚家族のどの

形態でも、子どもの父がだれであるかは確かでないが、その母がだれであるかは確かである」<sup>22)</sup>と述べ、人間にとって究極的な血縁の証明は母親との結びつきだけにあるとしているが、それは先史時代に遡らずとも、ゲルマン人の父親が、ヨーロッパ中で痛いほど身をもって経験したことではないだろうか。

今日数少ない古高ドイツ語による文学作品として残る叙事詩『ヒルデブラントの歌』には、家族を残して長いあいだ戦いに出たゲルマン戦士が、故郷に帰還したとたん自分の子から血縁関係を拒絶される様子が描かれている。

「年を経て経験豊かな我が身内の者はこう語ってくれた。我が父の名はヒルデブラントなりき。我が名はハドゥブラントなりき。はるか昔に東方へ遠征し [中略] 自らの領土を貧しいまま見捨て、若き妻と未熟な息子を家に残したまま、あとを継ごうともせず・・・」<sup>23)</sup>

ランゴバルド族の老戦士ヒルデブラントが、三十年にもわたる遠征の末、北イタリアに帰還し、自分を父と認めない一人息子と決闘せざるをえない状況に陥るのがこの作品の内容だが、これはこの時代のゲルマン人の男たちの多くが抱いた人生へのむなしさを表現したものと読み取れるし、またそれは同時に、言語を蔑ろにしたドイツ人がその後一貫してたどる女性恐怖の運命をも暗示している。

こうした民族大移動期にゲルマン人の男たちが体験した戦慄に加え、そもそもゲルマン人のなかで女たちが果たしていた役割が、独特な原初的神秘性を帯びたものであったことも、その後のゲルマン的世界を特徴づける女性恐怖の源泉であるように思える。ゲルマン人の生活を全般にわたって詳しく記したローマの歴史家タキトゥスの『ゲルマニア』には、戦いの際に森の中から甲高い叫声を上げて男たちを駆り立てたり、怖じ気づいて退却しそうになった戦士には裸の胸を見せつけ、戦意を鼓舞するゲルマン女性の様子が記されている。こうした気性の激しい女たちにゲルマン人の男たちは、崇拝の念は抱きながらも、女神をつくる意図はなかったと語られることから察せられるように、女性が、神秘的な畏敬の対象であったことがうかがわれる。<sup>24)</sup> 同様な女性恐怖への萌芽ともみられる記述は、『ヒルデブラントの歌』と並ぶ古高ドイツ語による作品例として名高い『メルセブルクの呪文』からも読み取れる。傷を癒すため女たちが入れ替わり立ち替わり呪文を唱えたり、敵の捕虜になったものを魔術で解放するため生け贄を捧げたりする内容のこの作品<sup>25)</sup>からは、ゲルマン人の女たち

が尊敬の対象ではないながら、男にはない力をもつ魔女的な存在として認識されていたことがうかがえる

こうしたゲルマン的女性恐怖が快楽敵視と結びつくメカニズムについて最後に触れておこう。人間が欲動の断念、すなわち自らの性欲を抑制する術を覚え無規律な発情状態から脱皮したことが、精神を生む直接のきっかけとなったというのは、一般に西洋知識人がしばしば好んで用いる定説である。欲動の断念を生み出す条件について、ドイツの哲学者クリストフ・テュルケは次のように述べている。

「欲動は、みずから自己制限にいたることはない。欲動が断念される場合には、すでにある特殊な方法で、自然に手を加える能力を人間にあたえるなにかが作用しているのである」<sup>26)</sup>

では、人間に欲動の断念をうながし、自然を支配下する能力をあたえる「なにか」とは何か。テュルケは、それこそが精神 **Geist** なのだという。この考え方は、本論の冒頭で紹介したホルクハイマーとアドルノのことばと見事につながるものである。彼らは、西洋人が誇ってきた精神も理性も、地球環境を搾取し尽くすための方便でしかなかった、と述べていた。それでは、精神とは本当に自然界を支配するためだけにあるものと理解すべきものなのか。

ここに、西洋の哲学者が語る「精神」が、われわれが一般に理解しがちな精神とは、やや異なる意味合いをもつ可能性が浮上する。なぜなら人間の精神とは、文化を創造する総合的な力のことで、そこには「楽しいこと」も当然はいつてくると考えられがちだからである。しかし以上に述べられる精神の意味は、違うようである。それは一般的に言えば、精神としてとらえられるものの半分だけ、どちらかという自然破壊に貢献するあまりよろしくない部分だけのことを言っているように受けとれる。フロイト流に言えば、人間の心を二分する本能のうち、生（エロス）の本能に比べ、死（破壊）の本能ばかりに重点をおいたものというべきだろうか。

七世紀以降のヨーロッパにもういちど目を戻してみよう。ゲルマン民族が支配する新秩序は、大浴場にもスペクタクルにも見向きもしない。ドイツの哲学者が語る精神が、快楽、それもとりわけ性的快楽を敵視せざるをえない環境のもとで生まれた〈ゲルマン的〉精神である可能性を、テュルケのことばは示している。

「性生活が制限され、抑制され、自然のままでの状態ではありえないときにこそ、人間の生活に変化をもたらす精神が機能しはじめるのだ。」<sup>27)</sup>

テュルケによれば、精神とは、けっして「過剰や食傷的倦怠」という人間の満ち足りた状態のなかからは生まれえず、「恐怖と困窮」のなかからこそ生まれうるものだとされる。しかし、禁欲が精神を生む条件には厳しい環境が不可欠だとするこのことばは、ローマが繁栄の極みに達していた時期に厳寒の北方の地に押しやられ、自然の猛威に恐れおののきながらろうじて原始的共同体を維持していたゲルマン諸民族こそ当てはまれ、古代ローマ文明からすれば、まるで見当違いな考え方ではないか。しかし、北方の厳寒の地で暮らすゲルマン人が生き残るためには、他部族との戦いに勝って食料と女と財産を奪う卓越した〈戦闘性〉と、それをつねに維持するための〈快樂の断念〉が絶対的に欠かせない要素であった。ゲルマン信仰においては、ゲルマン人は戦いで勇敢に死ぬことこそが天国ヴァルハラに召し上げられる唯一道だとされ、床で平穏な死を迎えることほど屈辱的な死にはないと考えられてきた。この激しいまでの死への崇拝 Totenkultこそが、ローマ軍を戦慄させた真の原因であった。こうしたゲルマン的世界においては、「経済的な欠乏の時期に部族間の戦闘が激しくなり、それが軍事的業績をあげた男たちに権力を握らせることになった」<sup>28)</sup> というゲルダ・ラーナーのことばにもあるように、男性の地位を高め父権制をこのうえなく強化する条件がそろっていたであろうし、そうした厳しい環境にあっては、女たちもまた自分たちなりのやり方で男の勝利に貢献せざるをえなかったであろう。

今日世界を動かしている真の動因が経済的なもの、すなわち資本主義であり、その資本主義をそもそも生みだした原因が、人間がみずからの性的欲望にけじめをつけたことにあったこと、つまり今日ある経済的世界と快樂の断念とは文字通り一心同体のものとして展開してきたと、文学者ティエリー・イーグルトンは説明している。<sup>29)</sup>ただ、これまで西洋人は、性欲の抑制がいかんにして生まれるものかに関しては、さまざまな説明を試みてきたが、資本主義の原動力をなす禁欲=快樂の断念の源泉がそもそもどこにあるのかを、不可解なほど曖昧なままにしてきた。

もういちど冒頭のホルクハイマーとアドルノのことばを思い起こしてみよう。ここでいわれる西洋人が誇る精神、すなわち世界のすべてを狩猟区とみなしと

ことん搾取し尽くすための精神には、支配はしながらも巨大浴場や闘技場を不可欠のものとみなす古代ローマ人の快楽を享受する姿勢は、完璧なまでに欠落している。ゲルマン民族大移動期以降に生まれた厳しい禁欲を旨とする精神とは、ひたすら「闘争的精神」のことであり、それは古代ギリシア・ローマ人が思い描いた精神のいわば半分を指しているに過ぎない。しかしこの激しい混乱期に女性恐怖と快楽敵視を精神に注ぎ込むことでヨーロッパの制圧を成し遂げたゲルマン人が、自分たちが伝統的に生存の闘争に勝ち残るための掟としてきた価値観によってローマ的精神から快楽の領域をきっぱりと切り離したことで、すなわちこの〈精神の分断〉こそが、やがておとずれる資本主義への重要な布石となったのだといえる。そしてまさにこの点にこそ、ヨーロッパの文化史を新たに理解しなおすための鍵が潜んでいるものと思われる。なぜならゲルマン人が西ヨーロッパ全土を支配するなかからヨーロッパの新秩序が始まったという事実は、ヨーロッパはどうしてそれぞれの国が固有性を維持しながら、どこかで共通しているのかという素朴な疑問に、まったく新たな答を提供する可能性があるからである。

ゲルマン人の支配体制が確立して以降、ゲルマン勢力がその地域から撤退したり、反乱によって打ち負かされた事実が、すでにみたように現スペイン地域を除けばない以上、言いにくいことかもしれないが、今日のヨーロッパ人は多かれ少なかれ、ゲルマン人あるいはその混血だとみなさざるをえない。しかしすでに論じたように、彼らは支配者となったものの、その引き替えに言語と宗教を放棄するという前代未聞な行動にでた。支配権をローマからアルプスの北方に移しながらも、文化を培うためにとりわけ重要な言語を浸透させることには、まったくといっていいほど関心を払わなかったのである。ヨーロッパ全土の支配体制を確立するために、ゲルマン信仰とは無縁なキリスト教を奉り、帝国の公用言語を地中海文明に根ざすラテン語と定めことにより、やがて神聖ローマなどという大それた看板を掲げた帝国が骨抜きにされる宿命を自らの手で招いたことは否めない。イタリアに残した息子に拒絶されるゲルマン戦士ヒルデブランドが覚えた驚きと戦慄、そして諦めに近い嘆きは、そのまま現代に至るまでドイツ的精神を苛むイロニーの核心を突いているとはいえないだろうか。

## 注

- 1) Horkheimer, Max/Adorno, Theodor W., *Dialektik der Aufklärung*, Frankfurt am Main 1988, S.264
- 2) Duerr, Hans Peter, *Frühstück im Grünen*, Frankfurt am Main 1995, S.105.
- 3) Lerner, Gerda, *The Creation of Patriarchy*, Oxford/New York/Toronto 1986, S.36.
- 4) Lyotard, Jean-François, One of the Things at Stake in Women's Struggle, in: *The Lyotard Reader*, Oxford/Cambridge 1989, S.114f.
- 5) Lyotard, a.a.O., S.114.
- 6) エンゲルス「家族、私有財産および国家の起源」『マルクス＝エンゲルス 8 巻選集 第 7 巻』(マルクス＝エンゲルス 8 巻選集翻訳委員会訳、大月書店、一九七四年) 一四一～一四二頁。
- 7) Lyotard, a.a.O., S.112.
- 8) Armstrong, Karen, *The Gospel According to Woman*, New York 1986, S.2.
- 9) アリストテレス「動物発生論」『アリストテレス全集 9』(島崎三郎訳、岩波書店、一九六九年)、一三四～一三五頁。
- 10) アリストテレス、前掲書、一六二～一六三頁。
- 11) アリストテレス、前掲書、一六九頁。
- 12) Carpenter, Rhys u.a., *Everyday Life in Ancient Times*, Washinton D. C., 1951, S.302f/340f.
- 13) Wir Deutschen: eine TV-Reihe von Bernhard Dirks 1.Folge: Römer und Germanen, eine Produktion von Studio Hamburg und NDR.
- 14) CG 世界遺産 古代ローマ (双葉社、二〇〇六年) 七〇～七一頁。
- 15) CG 世界遺産 古代ローマ、前掲書、六一～六三頁。
- 16) ハフナーは、古代ローマで用いられていた用語が如何にそのまま今日用いられているかを、次のように述べている。「知る知らないはともかく、今の私たちが使っている法律用語、国家機構に関する言葉はほとんどすべてローマ起源であり、政治家、役人、属州、管区といった法治国家を組織する要素からして、みなローマ人が考えだしたものなのである。また、軍団、分隊、歩兵、騎兵、砲兵、師団、大隊といったおなじみの軍事用語でさえ、まぎれもないローマの遺産であり、[中略] その他にも、サーカス、ロマンといったように、今の私たちには当たり前の言葉がいくつもあり、それらは綴りからしてすでにローマ起源を表している」Haffner Sebastian, *Historische Variationen*, München 1985, S.32.
- 17) Haffner, a.a.O., S.38.
- 18) ゲルマン人とは、紀元前に、出身地とされる現在のインド北西部から西へ移動

をはじめ、ヨーロッパ北方地域に大量流入してきた民族の総称である。数多くの部族からなるが、共通して古高ドイツ語として分類される今日のドイツ語に通じる言語を使用していたことによって他民族、とりわけ古代ギリシアやローマ人など地中海文化に属する民族と区別される。

歴史家フィッシャ＝ファビアンは、紀元前百十三年に、オーデル川からエルベ川沿岸地帯に恐るべき数の戦闘的な民族が移動をくり返している様子が、ローマに初めて報告されたことを伝えている。この報告によれば、百万にもおよぶ数のこれら野蛮人はが、進んだあとには、イナゴの大群が襲来したあととのごとく、荒廃した土地しか残らなかったとされる。とりわけ三十万人からなる戦士はすべて金髪碧眼の巨漢揃いで、連中は死をまったく恐れず、戦闘で死ぬことこそをもっとも名誉なことと考えていた、とされる。Fischer-Fabian, S., *Die ersten Deutschen: Der Bericht über das rätselhafte Volk der Germanen*, Locarno 1975, S.17.

紀元前八十年にギリシアの歴史家ポセイドニオスが、バルト海沿岸地域にいたアリオヴィスト(Ariovist)王率いるゲルマン系スエーベ族(Sueben/Sweben)が、ガリア人の住む現北フランスへと侵攻してきたことを報告している。カエサルが『ガリア戦記』において、これら戦闘的な民族を「ゲルマン人 Germanen」と初めて呼ぶのは、それから二十年ほどのちの紀元前六世紀のことである。Arens, Peter, *Sturm über Europa: Die Völkerwanderung*, Berlin 2003, S.27.

今日一般には、現在のデンマーク人、スウェーデン人、ノルウェー人、アイスランド人、アングロ・サクソン人、オランダ人、ドイツ人などがゲルマン人を祖先にもつと説明されるが、実際には本論で示すように、五～七世紀にかけて、ゲルマン人の諸部族がヨーロッパを隅々にまで席卷し王国を築いたことを考慮すれば、むしろ西ヨーロッパ全土が、ゲルマン人の支配下のもと現地に暮らす地中海文明やケルト系の人びととの混血を通して形成されたと考えるのが妥当である。

- 19) *Wir Deutschen*, a.a.O.
- 20) Arens, a.a.O., S.215.
- 21) Dürrenmatt, Friedrich, *Romulus der Große*, Zürich 1998, S.111f.
- 22) エンゲルス、前掲書、一五一頁。
- 23) Gutenbrunner, Siegfried, *Von Hildebrand und Hadubrand*, Heidelberg 1976, S.25ff.
- 24) Tacitus, *Germania*, Stuttgart 1972, S.15.
- 25) *Die Merseburger Zaubersprüche*, Wiesbaden 2003, S.1/90. Fischer-Fabian, S., *Die ersten Deutschen*, a.a.O., S.319.
- 26) Türcke, Christoph, *Sexus und Geist*, Frankfurt am Main 1991, S.10.
- 27) Türcke, a.a.O., S.10.
- 28) Lerner, a.a.O., S.46.

- 29) Eagleton, Terry. *Literary Theory - An Introduction*. Minneapolis 1983, S.151.